

最期までその方らしく 生きることへの支援

特集にあたって

『作業療法白書 2010』¹⁾には、作業療法の最終目標は障害の軽減ではなく、主体的な活動と参加を援助することであり、その専門性はその人らしく生活できるよう支援することと記されている。このことは、対象者のライフステージや疾患を問わず、作業療法として普遍的な事柄といえる。では現在、終末期にある対象者に作業療法はどんな支援ができているだろうか。過去から述べられてきた具体的な事例を参考に、どこかの現場でも提供できるものとして整えられ、OT 以外にもその必要性を広く認められるものになっているといえるだろうか。

今回、「最期までその方らしく生きることへの支援」というテーマから、終末期における作業療法について概説し、実践されている方々にご執筆いただいた。それぞれの立場により異なる具体例は、状況の違いや複雑さを表しており、同じような現場に従事する OT、あるいはその経験がない OT にとっても大いに参考になるものと思われる。

人生最期の時間をその人らしく過ごすこと、その重要性は広く語られるようになった。そのような時代だからこそ、OT という専門職が終末期にどのように貢献できるかをあらためて具体化する必要があると考えられ、それは専門性の一層の確立や職域の確保、さらには作業療法の存在やその必要性を世間に広めるためにも避けられないものであると思われる。

(福田卓民)

文献

- 1) 日本作業療法士協会(編):作業療法白書 2010. 日本作業療法士協会, pp12-15, 2012

企画担当

福田卓民 (青梅慶友病院, 作業療法士)

江藤文夫 (国立障害者リハビリテーションセンター前・総長, 医師)

澤 俊二 (藤田保健衛生大学, 作業療法士)